平安神宮の庭園

平安神宮の庭園は、4つの美しい庭園から成り立っており、そこには大きな池や、流れる小川、飛び石や、京都御所から移築された、美しい装飾が施された建物があります。季節ごとに咲く花々により、一年を通して美しい色彩を楽しむことができるこの庭園には、座って景色を楽しむ場所が設けられており、ゆったりとした自分のペースで巡れるよう設計されています。30,000平方メートルにも及ぶこの庭園は、約40分ほどで回ることができます。

神社とその由来

平安神宮は、古都としての京都の遺産を讃えており、平安京の最初の天皇と、最後の天皇を祭神として祀っています。794年から1868年まで、1,000年以上にわたって京都は日本の首都であり、平安京として知られていました。平安神宮は平安京の最奥部の一部、天皇が国事を司っていた天皇御所の正庁である朝堂院を模しており、当時の朝堂院を8分の5の大きさを復元されています。縮尺された復元とはいえ、平安神宮の素晴らしさは見事なものです。入り口には朱色の巨大な門をくぐると、装飾が施された建物で囲まれた広々とした中庭にたどり着きます。

平安神宮は、平安遷都1100周年を記念し、1895年に創建されました。ここには、日本の50代目天皇であり、平安京を築いた桓武天皇（737～806）が祀られています。桓武天皇は、平安京を治める以前に、やや規模の小さい当時の首都であった奈良県の平城京を治め始めました。国と政府の発展に伴い、彼は、より広大で堂々たる首都の建設が必要と考えました。彼は現在の京都を新たな首都の地として選び、793年にその建設を開始する様、命を出しました。794年に政府は新たな首都に移り、そこを平安京と命名しました。これが、歴史上で平安時代（794～1185）として知られる、平穏で芸術と文学が発展した時代の始まりです。桓武天皇の治世は25年間（781～806）に及び、新たな法の発令を通じた政府の発展、学問の促進、アジア諸国との貿易や交易の支持など、彼の国の発展への功績が讃えられています。彼は、京都の生みの父として捉えられ、大極殿の背面に位置する本殿に祀られています。

平安神宮には、平安京最後の天皇となった、孝明天皇（1831～1866）も祀られています。彼の治世は、江戸時代の終わりに近づいた頃の21年間（1847～1866）に及び、産業の促進に繋がった社会的・政治的な改革と日本の近代化を支えるなど、明治維新の基盤を作り上げた功績が讃えられています。明治維新により首都は東京へ移り、平安京は京都とその名を改名しました。

平安神宮は、古都平安京と、72代の天皇の治世に渡るほどの長期に渡り、日本の首都としての役割を果たしてきた歴史を讃えています。